御白遺稿

内容

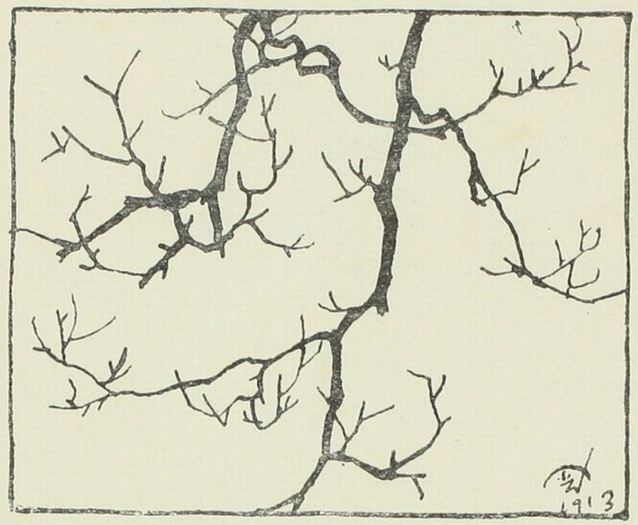
ゆく雲
あやめさく日に
寂しき心
七日七夜
故郷
赤楊樹
生きむとす
死ゆく道すがら
愛と死と
平塚より

七里ケ濱より
鈴虫の死と海
太陽を與へよ
死ゆく小鳥
ないふの錆
生れし日
五月來る
最後の手記

追想錄

定價金九十錢

御白遺稿



御白遺稿

内容

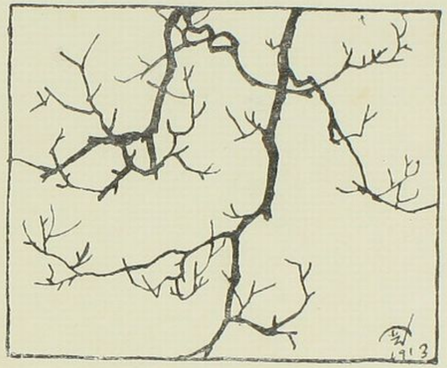
ゆく雲
あやめさく日に
寂しき心
七日七夜
故郷
赤楊樹
生きむとす
死ゆく道すがら
愛と死と
平塚より

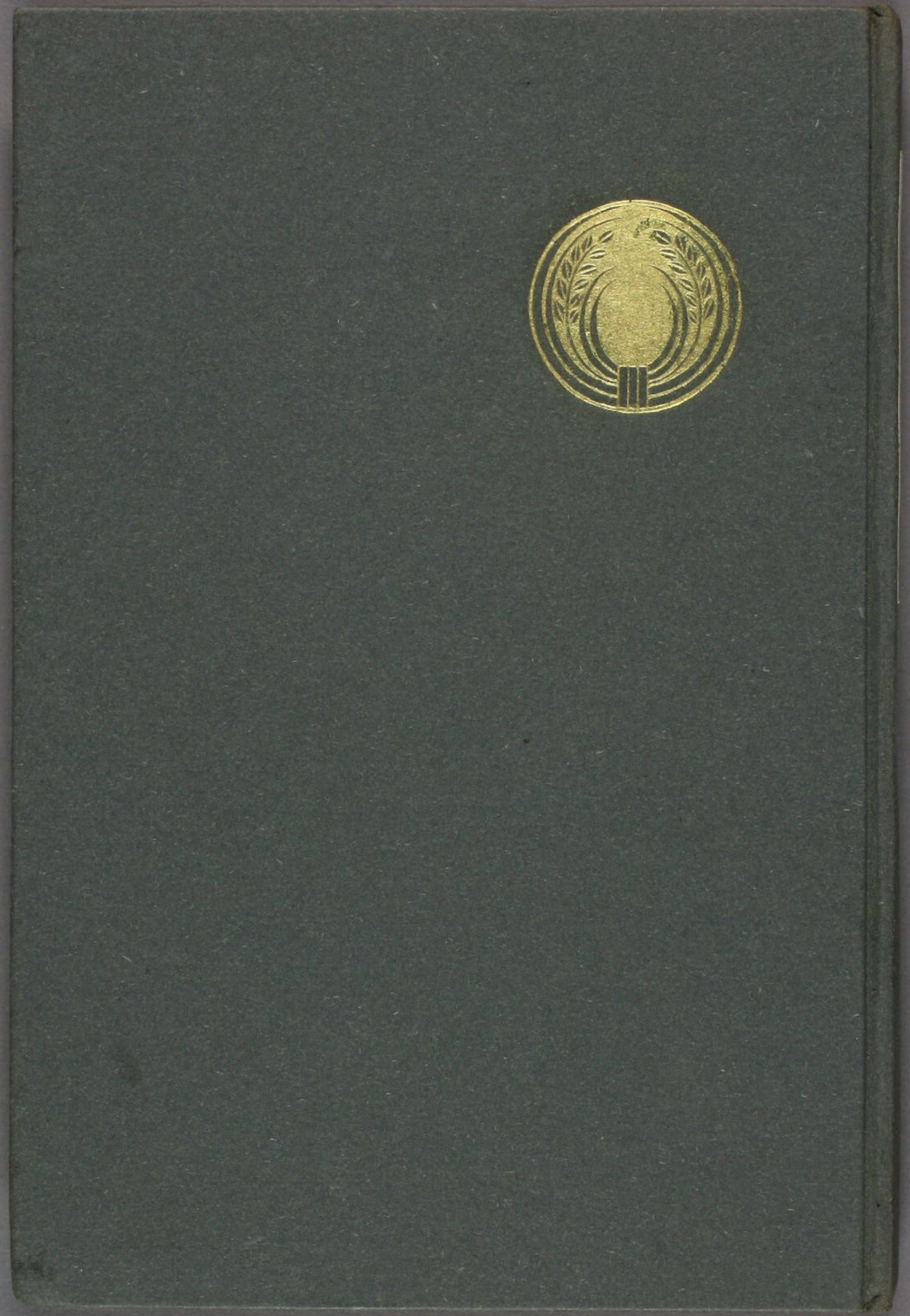
七里ケ濱より
鈴虫の死と海
太陽を與へよ
死ゆく小鳥
ないふの錆
生れし日
五月來る
最後の手記

追想錄

定價金九十錢

御白遺稿





御白遺稿

御白遺稿

謹んで本書を故御白田波庄藏氏の靈前に捧ぐ

序歌

＊

いたはられいたはられ若く死(ゆ)くは、
友よ、
病は、幸なるべし

＊

みかへれば友の病體、
みかへれば海、

海はつれなかりけり

泣くにも泣かれず、
この病人のやせはてけり

うすひかる海の面をみつむるにたへず、
かたへの友はやせてけり

かはりはてしこの病人にむけむには
あまりさびしき、

われのうしろかな

*

はや咲のさくらは
友のまくらべにとるべきにあらず、
つれなし、さくらは

電燈のさみしく晝はきえてあり、
病みやせて友は更にたふとし

みつふたつ
おもちやの人形もおかれたる
病室に、友とわかれをぞする

*

見るかぎり七里ヶ濱は波たかし
あらしさへする、
わが友のため
雪白の布に被(き)せられ、

わが友のなきがらは
見入れば、見入れば志づかなり

なきがらの
髪の地肌のあをあをと
空にもましてさやかなるかな

わが友の死出の旅装のかひがひし、
双(さう)のわらじを手にとれば泣かるる

細長き木の箱となしをはるべき君ならず、
わが涙はてなし

つきそひの女のひとの泣きぬるるかたへに、
われの手をあはせける

*

人目なく
友の死骸にとりつきて
泣きおぼれぬるひとりはたれぞ

たぞひとり
泣きくづほれて眼もあかず、
空しき骸につきてゐるかな

わが友はいづくにゆきし、
なきがらにかほかたちまろく残るなりけり

なきがらはまさしく友に似てをりき、
雪白の布に被せられて寒く

病院のはなれの狭き死室にも
おもひのこしてかへりゆきけり

村雨の白沙濱にわけいりし
棺かへらずなりにけるかな

大正二年十二月十七日夜

鋲

策

内容

ゆく雲（二〇）
あやめさく日に（二七）
寂しき心（三六）
七日七夜（四四）
故郷（五一）

赤楊樹（六八）
生きむとす（八一）
死ゆく道すがら（九二）
愛と死と（九九）
平塚より（一〇九）
七里ケ濱より（一三〇）
鈴虫の死と海（一四四）
太陽を與へよ（一五四）
死ゆく小鳥（一六三）
ないふの錆（一七四）
生れし日（一八八）
五月來る（一九二）
最後の手記（一九五）
追想錄（二〇九）

御白はみしろと訓み水代に通ずる、水代は彼の戀人の故郷である、三十六年五月、雜誌「新聲」に見せたのが最初のやうに思はるる、以前は水韻といつてゐた

帝國文學

自明治四十一年十一月
至大正二年十月

ゆく雲

ゆく雲に雲の聲なしゆく水に水のこゑなし秋きたるらし

秋の風そよろとふけばそよろそよろおぼつかなげの女郎花かな

やせやせて千草が中によろめきつ何に墮(お)ちにしをみなへしぞも

鬼灯は秋草がくれいろづきぬ小妹なきが
ものたらぬかな

風さやかに海の遠鳴おとたかくすがすが
しくも秋たちにけり

わが柩おくらるる夜にあらじかとふと
もはれつ雁をききけり

氷雨(ひさめ)すれば涙ながしぬやせやせて
だなせる冬木立ども

白壁に萎えし木の葉のかげをごる蠱物(まじもの)な

すと見ておもしろし

あひあへば言葉もわすれ唖(おし)となりむかひ

て笑みて別れさりけり

相見ざる二日こころも火となりて君を欲(ほり)

すれひるよるとなく

死ぬといふおどかしをもて君われになぐ

さめごとを強ひたまふかな

いつとなくつくり笑(えみ)する君をみてわが身
さびしき秋に入りけり

天地のむくろ忘づかに睡てありぬちひさ
き春の月にてらされ

ある時はなすべきことを爲しはてし土曜
日のごとのごけさに居り

あやめさく日に

ああ皐月ふぢさく時に母うせきあやめさ

く日に君をえてけり

ゆく春のたんぽぽに似て髪白き君はもさ

らに戀せむといふ

尾をもたば尾をもふるべし犬のごと女の

前に媚びむとはする

巧にも君そらなきすそれとわが知らぬな

らねど涙してけり

消息の三日みえねば人の世をはかなみに
けるわれのかはゆさ

木は石となる年月も戀はむとぞいつはり
ならぬいつはりをいふ

ただ六日されど花さき花ちりきいとあわ
つけきわが戀もしき

わが胸は青葉ぞ去げるそのかげにつぶつ
ぶ見ゆるかなしみの果よ

婆羅門の小田なる鴉いくたりの男ころし

し眼ついばめ

君がゆく時は道行く人人に眼かくしすべ

き掟たくまく

埃及の女王のごとく美しう死なまく毒の

蛇あつめまし

あひわかれて目は死魚のそれのごとやが

てひからび石とかならむ

何にさは心たらひてうたがはず時計の族(ぞう)
よ足はこびゆく

春木立いささか皺の見ゆれども
脈のいとたかううつ

ことさらにつくりごとしてわれとわが心
かなしめうれしむ日あり

雲鳥いふ汝が食む戀の果(み)をすててこの中
空に歌うたひ見よ

寂しき心

燃えもせずはたきえもせず胸のいづこ生
木かけぶるあなけぶたしや

いつはりの涙を追うていつはりの涙ぞは
しる君が頬の上

初戀のうすき羽衣まだぬがぬ尊き少女と
もおもふかな

ふと君のこゐして、日日にわれをのみ思ふ

につかれまさずやといふ

秋の夜のありあけ月の色見せてうなだれ

はてしわがこころかな

思はるる人のごとくによそほひて人中に

ゐるさびしきこころ

君をにくむにくむ、われをば言ひときて心

はなほも戀ふるにかあらむ

若人のゆきてかへらぬうしろかげ見せて
いたまし夏くれむとす

蜻蛉來て廬のうら葉のいづれにかとまら
むとするほどのたゆたひ

馬の眼をみつめてあれば彼の眼にわれな
きごとく玄づかなるかな

青廬に潮はみち來ぬ水鄕の八月夏の月は
いでにけり

思はるる身なればさびし別れては再びあ
はむ日なき如くに

別れてのさびしさもまた知らざりしひと
つなりけりあひあはぬ日は

こころにもなきなぐさめを君はいふいさ
さかわれのそら泣もしつ

わがこころ物にまごはず美しき人見てひ
たに戀ふるなりけり

七日七夜

かなしみに心は七日七夜ほど水漬きてあ
りぬ石となるべき

心さと不安にくもるなにげなく別れしと
きの君を思出づ

むきむきにはぐれはぐれに蔓のべぬ六日
見ざるに二人のこころよ

いささかの怨言きかまくともすればこと

さら君をあざむきて見つ

つゆ草の花など越して清浄の野の水ながれ夏は來にけり

ゆるやかに二人がなかにひろごりて煙草の煙の輪はくづれけり

灯ともして障子をさしてわが世界つくらむ秋の夜はなつかし

われを見て君は涙すうれしくもかなしき
ばかり君は涙す

思はるることをこよなきほこりとしはか
らるるとは知らざりしかなし

冬の日よなれが死ぬるも近からし力なげ
にも照るひかりかな

金絲鳥のよくなく日なり小春日の空はあ
かるくほほゑむ日なり

やがて死ぬ秋におごりて葉鶏頭のいとに
ほやかに立つがさみしき

無花果の果はもちぎられ廣き葉のひとつ
落ちひとつおち秋はふけにけり

故郷

ふともわが跫音ききてなほわれのあるを
おごろく日となりにけり

草も木も生きむとしてはつかれぬる眞夏
の光みなぎれる野に

われとわがはかり知られぬものごとの君
を得しより漸く多し

夏の夜はふけぬ玄づかに玄めやかにわが
このおもひ君になが るる

水の如く夏の夜ふけぬ夜の底に人はも魚
のごとくねむれる

枯草のうへに玄づかにいねてあり木の葉
ちり來てわれを埋めよ

ひとときはみつからわれをあざけりてこ
ころは少しはれにけれども

茄子の花うすむらさきにさきのこる畑の
すみに晝もなく虫

犬を見る慈悲のまなこをうつし來て君を
ながむる日となりしかな

第六高等學校時代

何人かわれのごとくにありえしを知りつ
つ君に思はれてあり

青海の底にひそめる魚のごともだしえざ
れば身はあやふかり

なにゆゑにかかることをば爲てけりと解(げ)
しえぬことの多くなりけり

來ぬ人をまつてふすでに第一歩ゆづりそ
めたるわれにはありしか

ころころとふればをかしき賽の目の三こ
を出たれ五をねがひしに
天鵞絨の衣かつぎてわがこころひるねす
るまに君は去りけり

心まづ喪家の狗のさまに似る三日ほど君
を見ねば吸はねば
別るればまたあはむ日のそれまではわれ
を忘れて君のあるらむ

くづれむとする椅子によりやすらかにう

まいするなり君がこころは

君をすてて多くの人をこひしうる身のか

ろさをばいま知りにける

來し方を見ればあさましゑもべらが主に

つかへたるさまのごとかり

あたらしき果實（くだもの）などをわがこころせちに

欲せりせちにさびしき

雨はれにけり野の草木春の日をあくまで
吸ひてのびむとするなり

ふるさとのさびしき村にちやるめらの聲
きくここち春はくれゆく

やはらかに春ゆくころのものあはれも
の思ふ人にゑみぬゑみらに

雨はれてくぬぎ林の樹樹の芽の青みしう
へに春はけぶれり

春の川音をひそめてながれゆくこのたそ
がれのなつかしきかな

つつましくをだまき草はむらさきに眼を
みひらけば春はゆきけり

やはらかに草ふみゆけばさくらちるやは
らかに身にかなしみは玄む

うそらしくもまことらしくもをかしくも
われらが噂たちて春ゆく

おもはざる空に月ありやはらかに光なげ
たり君はまつらむ

赤楊樹

野に一列ひとしきほどにたけのびて赤楊（はんの）
樹（き）どももわかばしにけり

いちはやく紙の鯉などなかぞらにひるが
へりひるがへり夏は來りぬ

初夏の朝のふたりの食卓に胡瓜のにほひ
つつましきかな

夜の食事はてて君まつ云ばらくをひとり
ばななの實などはむなり

すこやかにかく秋の中に生きてあるわれ
をながめてわれをあやしむ

ただひとり云づかにいねてただひとり云
づかに起きて生きてあるべき

なにとなきさびしきものにいざなはれ涙
いつしかにじみいでけり

樹樹なべて實(み)をばはらめり銀色の月夜と
なりぬ人ぞこひしき

そともにはくろき音して雨ぞ泣く眼とぢ
て秋の夜を壁による

ちるちるちる秋の木の葉のいたましく夕
風のなかにちりてゆくかな

消えなむとして未だ消えざる生命ありか

くして秋にまためぐりあふ

なけこほろぎなけすずむし夜はふけぬ投

げたる身をば秋よさいなめ

なにごとか志きりに物をおもふらしわが

心根を秋のわらはむ

秋のまなかわがあめつちのかたすみに虫

におとらぬ生命をつなげる

すひなれぬ烟草のけむりそれとなきかな

しみどもの身にまつはり來く

濱菊のふたつならびて咲きてありふたつ

を摘みて去みじみと見る

はぐくみていつとせまでもそだちたるわ

れらが戀はころされにけり

かかることと戀はれたる日のはじめより

こしも思はざりしならねど

いつはらずこのかなしみをかなしみえず
慰めむとするかなしきこころよ
死するとも君わすれじといひなれしこと
などなにのかかはりあらむ

死するまで思ふとならば思へかしいつは
りごとをなすもよし

まづさきに戀せし彼女の時來り去りゆく
なればわれはとごめじ

このごろの心がおもふことすべてよわき

こころがたくらむそらごと

心よりわれをこひしや得知らねごわかれ

て知らぬさびしさにあふ

生きむとす

わがままにならぬわが身をただひとつの

こして年は去らなむとする

病めばいやし生死のほどもわかぬ身の食
物のこと思はぬ日はなし

冬なれば去づやかに空をあゆみつつやは
らかにわれをながむる月よ

抉りぬきてわが肺臓のひとひらを投げあ
たふるも犬も喰はじ

死ぬもよし醜きむくろのこすなく畑のご
とく消えていなまし

わが指にきずつけ若き血を絞り博士よ何
になさむとするや

時ならず青き一葉の人知れずちりゆくご
とくわれの死ぬらむ

今日はまたわれみづからのおそろしきば
かり心の玄づかなるかな

熱たかし九度をくだらず身はもゆるもえ
つつ灰となりて消えゆけ

髪ものび鬚ものびたり誰ぞやも來て鎌もて
髪を鬚を刈らずや

をさなきころおもちやをとりてこはすこ
とおもしろかりきこはして見むか

ひとときほどおもちやをもちて餘念なく
あそびてありぬわれながらをかし

死なむとてか生きなむとてか來りしやこ
の眞白なるベットのうへに

われねむる間も内臓の黴菌等たえずなに
をかはたらくくらしき
あはれなるわが内臓よやがて死ぬ命と知
らずかすかに音する

肌をきるも胸をさすとも血のいでぬ虫の
ごとくに痩せてわれ病む
少年のころ脚をぬき首をぬきとりし昆虫
のことふとも思出づ

わが生命はみつくさむと數知れぬ微菌ど
ものうごめくをかしさ

美しき人ら林の落葉ふみあひびきすらし
よく晴れし日かな

秋はものの死ゆくときぞ云づやかに草木
も虫も死ぬわれも死ぬ

母いまさば絶入るばかりかなしまむ兒が
病むといふただ一語にも

死ゆく道すがら

神佛を信じえずおのれのみ信じこころ玄
づかに死ゆくうれしさ

若き血をみな吐きつくし若くして死ゆく
こともうれしからずや

玄づやかに病いゆるをまつ日ありまた玄
づやかに死をまつ日あり

はらからの末に生れて第一に母がりゆく
を幸(さち)とすべしや

うすあはく空にかかれる太陽もわが病む
冬は氷れとおもふ

われ死するも生くるもわれになにほどの
かかはりあらむ去づかにねてまし

病病なれがほりするなにものもあたへむ
取りてとくとく去りゆけ

日に九度ことなる薬たうべつつかすかに
呼吸をつづけてあるかな

ねむれる間にたぞ毒薬の一滴をわが水薬
の瓶にそそげかし

からすからすみにくきこゑをはりあげて
さけべさけべわれのすこしなぐさまむ

生の世も死の世もわれの選ぶなしただ今
日の日を早く去らしめよ

今日はこころ輕くあかるし癒えゆかばこ
れをせむあれをせむなどおもふ
黒き扉のまへにたたずみ何おもふ汝が力
もてつよくたたかずや

愛と死と

死ぬとおもふにわれよりほかにたよるべ
きなにものもなしかかるうれしさ

つよしとやよわしとや死のちかづくを日

毎玄づかにまつこのこころ

死をねがふこころひそかに春をまつあな

生きむとすいつはりごころよ

バックを見ておもはずわれのわらひたる

こころよ何かさびしきかなしき

おもひみよ白き腹をばうへにして水に喘

げる魚とわが身と

うごかさばみなちりぢりにくづれやせむ

ベツトの上のわれのむくろよ

ひるも夜もこほりの下に壓されつつ心臟

よなほこごえ死なずや

薬瓶にふれし指さき針をもてさされしごとく眺めいりたり

いもうとよ林檎むく汝が白き手のつめたく光る指輪をとりされ

ただひとりましろき室にねでおもふ人あ
ることの幸なるかな

あたたかに冬ごしもなく夜の雨がふる病
める心もすこしなごめり

殘りたる生命のすべてひたすらに君を戀
ひつつわれの死ゆく

かあてんをなひきそ、いまだ春の日はくれ
やらず星さへも輝きそめたり

病めば心きよくたふとしひとすぢに病よ

なれもにくみがたきかな

血を吐かばすがすがしくもなりぬべし咽(のん)

喉(ど)つまりていきぐるしきかな

このねがひかなはば
花よ紅うさけと
土をきせたる秋草の
たね

このれがひかなはば花よ紅うさけと土をきせたる秋草のたれ

原田　實書

平塚より

黒ずみて蜂の巣のごと穴あきし肺をばいだく我なりなよりそ

蓬餅汝はほりすとや口ぎたなき男よ汝は
死にてゆく身ぞ

わすらるるともなく友にわすられて死ぬ
としもなく我の死ぬらむ

いつまでか糸のごとくにながらふる生命
ぞいまし春もくるるに

愛されぬ愛しぬかくて世になにかのこれ
る生命ながらふるべく

黄濁の海のうへとぶかもめかもめ肺やむ
われにいたましいぞよ

海鳥よ何事もなくあそぶらむむくろとな
りてわがかへる日も

いささかはこころうれしく馬入川こえて
來ぬれどこのかなしさは

籐椅子は廊にあれどもいつの日か樂樂と
ねて日を浴ぶるべき

やがて死ぬ身なるになごてかくばかりさびしき地をばもとめ來にけむ

わが來しをかなしむごとくこの三日涙のごとき雨ふる平塚

なげかひとかなしみのほか生くるべき境は知らず死ぬべきいのち

なければとてかなしめばとてなければとてかなしめばとて死は死は來る

人こひし友こひし都こひしさびしかなし

といひつつ死ぬらむ

惜からぬ生命とまことといひえしは昨日な

りしかいつなりしか

死ぬる日のはるかなるごと眼のまへにあ

るがごとくに六月きたる

死ぬといひてわれみづからをなぐさめし

昨日はすぎてかなしきこのごろ

五月雨よふれふれふりて樹樹の葉のみざ
りをくろく朽ちはてしめよ

明日といふ日のありなしもえ知れざる
びしき際（きは）に生きてあるかな

ほとゝぎす來なくさつきやいよよわが終
焉の日のちかづきぬらし

ちからなくまなこをひらきちからなく
なこをとぢて幾日あるべき

月あまりこの平塚にへぬれどもまだ海も
見ずまだ死にもせず

かなしみにあけくるしみにくるるこのご
ろの日も夜もあらず死にちかづける

ほそぼそとつなぎとめ來しこのいのちい
ま絶えなむとして血を吐きにしか

まなことぢてかなしき生命おもひやる初
夏の朝涙ぢきりなり

松の芽のすくすくのびてやはらかき針と
なる日の六月來る

うらやましはつなつかぜにふかれつつ何
かささやくらし草と草

玄づやかに世は春となり夏となりぬ病み
たる人はとく墓にゆけ

初夏のひかりのなかにすこやかに生ふる
草木の幸をうらやむ

死ぬる日のちかしちかしと一日すぎ一日
すぎあはれ夏に入れりけり

見るかぎり麥生黄に玄くふるさとのさま
なごおもひ涙してけり

黄に熟れし麥のにほひのゆくりなくさま
よひ來ては涙をさそふ

青き花玄じにちりちるゆふべあらむ玄づ
かに眼とぢて死をまつ

かなしみてなにをみつむるわが眼いまな
がらふべくもあらぬ生命ぞ

若葉若葉病みぬればもの見れば涙ながる
天地いつか夏に入りけり

以下、謹んで、姉崎博士、小林愛雄氏、佐藤貞次郎氏、
魚住衛氏、柚利淳一氏、和辻哲郎氏、にささぐ

父とあふぎ兄とたのみて二年ははやすぎ
にけりひとり病みてあり

病みぬればわが下野もはるかなり相模の
雨になきぬるるかな

墓石もいまだたてざる母の墓には
の白くふくらむ

心さへ身さへいまはたどろどろに泥のご
とくにつかれて死をまつ

相模野にひとりし病めばさびしさのかな
しさのよせてわれを死なしむ

風秋となりて心も身もほそるさびしき人
に死を強ふるかな

七里ケ濱より

この愁たれにかたりてなぐさめむ友よと
いへど友なきかなしさ

七里ケ濱このあはれなる歌人のつひの墓
ぞと海ひろごれる

海藻のにほひかなしき夕風に涙はてなく
友をこそおもへ

月は海をはなれぬ友よともにあればかく
までわれは涙ながすまじ

いづくまで身はうきくさの根をたえてさ
まよひゆきて枯れはつるべき

友のなさけはらからのなさけそのなかに
うちひたりつつ死にうるさいはひ

寝かへりにおもたき枕もたくれば
て秋の海すこし見ゆ

わが熱のたかきひくきにいささかの
はりもなく海はたかなる

月と海ささやきそめぬわなわなと心ふる
へて死をおもふかな

今日の如き昨日のごときわれの日の幾日
かつづき死に至るべき

食事すらねながら人にやしなはるあさま
しき身のはても見るかな

日毎ながめし崖の木の果のあかきをばか
もめついばみさりしかなしさ

去めやかに虫なき出でて月さしぬ肺療院
の秋の夕ぐれ

そともには去らゆきふれりさくさくと林
檎をかみて去らゆきを見る

玄らじらと鐵瓶の湯氣あがれるに心玄ば
しはうれしき朝かな

よせてはかへしよせてはかへす潮のごと
死よいつまでかなぶらむとすや

あざやかにかなしみありて人は生く死ゆ
く命海よはぐくめ

海は海われはわれとて日もすがら何をか
なしみなになげくらむ

冬の海人に去られぬかなしみを秘めつつ
はろにひろごれるかな

いまはとてながらふべくもあらぬ身の涙
ながして何をおもふや

涙ながして笑ふこときえおぼえたりやみ
てふたたび春にあへりけり

いつまでかゆきつかへりつ涙ぐみさまよ
ひありく我にかあるらむ

午後となればうすらさむけくくもり日と
なるくせつきて春も去ぬるや

太陽を見れどはたまた海を見れどわれの
如くに孤獨なるかな

詩

歌

大正元年十月

鈴虫の死と海

なきなきて籠のすずむしなき死にぬくろきちひさきかはゆきすずむし

鈴虫のちさき死骸をぢつと見つめ見つめて石のごとくなりしこころ

死にのこりてまたいたづらに秋にあふよろこぶべきかかなしむべきか

秋よ秋よわが身ひとつにつごひ來よかな

しきはみきはめて死なましを

死ぬるにあらず生くるにあらず昆虫の地

を這ふさまにうごめくいのち

眼をとづれば秋みなぎりて身にせまる聲

たからかに風ふきわたる

昨日は昨日今日は今日とてかなしみにぬ

れにぞぬれぬ何にか謝すべき

胸の底より涙せき來てとごまらずむしば
みはてし生命秋に入る

死んでしまへ死んでしまへとねぶられぬ
夜の枕にひびく海のこゑ

ネムノ木

大正元年十一月

見渡せば海には海の秋來る涙ぐみつつ死
をおもふかな

秋きぬとよろこびてさく花もあらむよろ
こびてなく虫もあるべし

ひそやかに寶玉のごとたふとみし右の肺
さへむしばみにけり

殘りたる一城をまた敵の手にとられしご
こち右の肺やむ

秋來るなべてのものはかなしめとやぶれし肺はとくほろべよと

殘りたる右の肺さへむしばみてわが世ふけゆき秋もくれむとす

新潮

自明治四十二年六月
至大正元年十月

太陽を與へよ

いたく君を戀ふるがゆゑに君死なばやす
かりなむとわれおもふかな

やぶさかに黑髮のただひとすぢの落つる
も惜しむ君を得しより

うつくしき人降りゆきて去みじみと冬の
夜汽車のさむさ身に去む

東京帝國大學時代

われらいま涙の渓をさまよふにつかれは
てたり太陽(さん)をあたへよ

エンヂンのうめきさけべるかたはらに去
づかに君を思ひつづけけり

水道の去づく去たたり去たたりて厨の冬
の夜はふけにけり

美しき疲労（つかれ）、牡丹はちらむとしつよきひか
りのなかにちりあえず

日一日ゆふべのごとくおもおもしく雨が

ふるこのごろのさびしさ

落ちちれるおもちやをとりて小半時もて

あそびしをうちくだきけり

小さなる顔をならべて蚊帳のなかに白く

ねぶれる二人の妹

思ふことありて書架よりとりいだす本の

の背皮青白きかび

ものうげに樹木はたてりゆく春の微溫の
ひかりただよへるなか

春の雨ぢかにふれる宵あさく微羞に臥
するあはきうれしさ

死ゆく小鳥

ふくらみてまなこをとぢて去ぢやかに死
をまつようはほかなき小鳥

やせやせしわれをめがけてかなしげにこ
ゑふりたてて泣ききたる蚊よ

君おもふ心とあはれむしばみし肺さを抱
き死(に)まよふかな

君が病にそまりて死なばうらみなしとや
はらかき君が唇(くち)にすはるる

ふと氣づけば青白きわが指尖のすはれて
ありぬはなしかねたる

小鳥らようたふをやめて牕に來よさびし
きわれの歌をきかせむ

彼岸すぎて櫻さきなばわが生命かすかに
いきをふきかへすべし

生死(いきしに)をねがふならねど春立たば春立たば
とも春はまたるる

晴渡るかの冬空の青を見よ眼ありてわれ
をみつむるごとし

死と對へどかつて思ひしひややかさ見出

ですむしろ慈母に似るべし

ちかづけば親しみやすくなれやすくなつ

かしげにも死は見ゆるかな

去みじみと死をおもひ死をおもひたるの

ちのこころのはれしうれしさ

平等に人をあつかふ死よ汝(なれ)がかたよりの

なきこころのうれしさ

わが知れるかぎりの人に愛せられ死ゆく
事のなにぞうれしき

都音子に贈る四首

われらふたりもつとも愛し愛されし罪か
死ぬばかりくるしめらるるは

をとこをみな親しむことはねたまるる少
さき國に生れし幸

つね子よ汝あらぬ一日の何ぞさびしきや
かなしきや十日も經なば我は死ぬらむ

泣かむとすれば涙ただちになが れくるこ
れのみがただこの頃のうれしきことかな

抒情詩

自大正元年十月
至大正二年十二月

ないふの錆

榲桲(ねえぶる)をむくとてないふをとればあかく錆
びてありこころかなしく志ばしみつむる

死まよふわれさそはむと黒き蛾よ夜毎と
ひ來(く)やもてゆけいのちを

病める枕上、ぎやまんの鉢に死のこりてた
だひとつただひとつ金魚は泳げり

かなしみをたうべつ日毎いきてありその
糧つくる日は死ぬるべし

神よなべて生あるものをころす勿れわが
生命ほしさにひたすらねがふ

生きるたけ生きし身なりや否や知らず
れや死は近きにあるらし

眼をとぢておもふ眼を開きておもふ何お
もふやらむ死ね死ねとこゑするる

平塚に來てなにゆゑかわがこころ死ぬる
をおそれ日毎かなしむ

眼さむれば病室の夜半に電燈あかくともるおそろしさ

七里ヶ濱海こころなく高鳴りて秋ゆくこころに人を死なしむ

心地よしいかれる海のこゑたかくまくらに近くせまれるごとし

友かへればこれぞこの世のわかれかと涙
ながるるくせとなりにけり

骨となりわがかへるべき下野の空さへ見
えず相模はかなし

親しかりし友とあるまもわがこころ石の
下にもあるここちする

秋の風われをめぐりてふきそめし落葉す
る音さらさらきこゆ

わが肺のむしばみはててくさるまでさい
なまれつつまつよりほかなし
われまことにかかる病に死ぬるべくすべ
ての事をなしも來にしか

七首、特にわが記憶より喚來りて、あらためて、門
司あたりに棲めるてふまち子に贈る(内藤生)

つくしなる女よわれの死をききて笑はむ
ゆゑに死ぬは口惜し

われをすてて鼬(いたち)の如くにげゆきし汝がか
しこさをひとはほむるらむ

おとなしき銀行員の妻として老いゆくな
れの幸をいははむ

汝がのぞみしそのいかめしき學士てふ虚
名を待たでわれの死ゆく

死ぬるわが汝ら夫婦の幸福をまづ祈らま
しまづのろはまし

なれもまた人妻となり母となりみにくく
老いて死にてゆくらむ

この病たがたまものぞ人妻よわれこころ
より汝に感謝す

七つのノオトより

生れし日

この手足この内臓はたがものぞわがおも
ふままにならむともせず

薬のめばむせび咳入り咳入りてあはれ男
の涙もながしぬ

眼をとづればたちまちゆめに捕はるるつ
かれし心つかれしむくろ

肋骨の數さへ今はあきらかによまるるま

でにやせやせてけり

ふわふわととぶは螢かわが靈か闇にきえ

けり氣味わるき夜や

病みはてていかにかなしきかみつからの

生れし日さへ忘れむとする

ふるさとのけやきよならよ冬枯の木立が

かこむ家のこひしき

五月來る

五月來るはじめて血をば吐きし日の濃き

くれなゐの五月は來る

つれなくも右の肺さへむしばみていちの

あらはになりし春かな

枕もとの瓶にさくらはおもふまま枝はり

てさけり病める枕もと

夫もあり子もありといふ隣室の患者も死う
せて春はくれにけり

死ぬるにはいづくもおなじさはいへどふ
るさとにかへりて死なまほしけれ

わが病むこと人にわすられはつるころ汝
づかにわれの死にてゆくらむ

最後の手記

七月二十一日

夜來の雨止みたれども終日曇天、冷氣甚し、
病人には大にたのぎよし

目の前にか　はたうしろにか
せまれるや　死よ　盲目の
この病人に

つかず　はなれず　わが寢る
まはり　さまよへる
そのまぼろしよ　そのまぼろしよ

手紙をやらればすまぬとおもふ人人赤木、安
原、井上猛一(原町14)

一日　一日　死のおそろしさ
つのりゆく　その死の前に
ふるへるこころ

自づから　両手は胸に

くまれぬる　又自づから
涙は流れきぬ

白きベットの上に　やせやせて
ねぶれるは　我が病氣かと

まごはむ弟

大なる呼吸して見たし
歌うて見たし
この去づかなる　夏の夕に

西瓜　西瓜　その液吸へば　生命
の水　わが肉體に
流るるごとし

つかれし　わがむくろ　豆の如く

小さくなりて　寝に落ちむとす
落ちてさめざれ

八月の白日（まひる）　肺療院にきりぎりす
きりぎりすとなく

きりぎりす

ふと思へば　今日は　故郷の于蘭盆なり
麻柄（をがら）の煙にのりて
われもゆくべかりにし

（以下筆談のやうである）

ヨコスカの姉の病院の名と所

横須賀　公廨

共濟會病院（令兄覺二氏筆跡）

トミは夕めしのおさいをききに來たの？

三號食ハ？

（ここに蝶が二つ書いてある）

タマゴ　ムス

鷄のツクネ煮

君のどがかわいたら

病院のでよければ

∞．XVIII　ABEND

雨はふらぬ

君がわざわざ遠いところを

來てくれて　話したいこともききたい

ことも　澤山あるが聲が出ないので

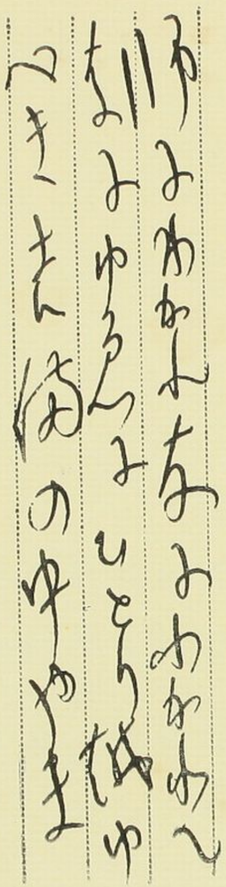
それができぬ、けれども僕はかうして

君と二人あると云ふこと丈で
充分の満足を感ずる　そして
君に謝する　（これは萬造寺齋君との談話）

「短篇十一種」
現代　に何かいたのか
長いのか

イツゴロカヘル……

（以下裂けてない、さうして前後してゐるところもあるやうだが、
故とそのままのせることにした　内藤生）



師にわかれ友にわかれてなにゆゑにひりと越ゆべき吉備の中やま

土岐哀果書

追想錄

小林愛雄
石坂養平
山田敏一
井上猛一
藤田福太郎
黒田幹一
内藤鋲策

追想記

小林愛雄

明治四十一年の夏に私の書齋を訪づれたひとりの青年があつた。見るからに、優しい靜かなにこやかな、どうしても文科にふさはしい姿の人、それは田波御白君であつた。はじめは國文科に入られる樣子であつたが、色色私の話したことなぞが、その人を動かしたのでもあらうか、九月の終り二度目に來られた折には、どうとう英文科にしましたと話された。それからの同君は、海外文學の研究にふける傍ら、穩かな風格の短歌をこの誌上に寄せられたことは、古い讀者の御承知のことであらう。

翌翌年帝國文學會の委員改選に際して、私が御勸めして和辻哲郎魚住衞佐

藤貞次郎柚利淳一等の諸君と共に、御白君にも委員の任に就いていただいた。其後、同君は短歌のみでなく、繪畫の批評や、海外文壇の紹介や、ことに清いなつかしい御伽話風の短篇の飜譯をされて、屢屢誌上に異彩を放つことが出來た。

三年の月日は早くもたつて、卒業さるべき年の明治四十四年が來た。その年の三月、同君のためには惡魔のやうな語學試驗がやつて來た。同君は他のあらゆる語學は悉く及第されたが、不幸にしては唯一つ漢文(和文漢譯)のために、一年を空費しなければならなくなつた。おとなしい御白君は面に相變らず微笑して居られたが內心の憂愁は十分に察することが出來た。私は見かれて當路の人にも相談をしたが、旣に發表した成績を如何ともしがたいとあつて効を奏しなかつた。

御白君が酒を飲まれたのはこれからであつた。其年の秋ハウプトマンの「寂しき人人」が舞臺に上る日の電車の中で、私は、和辻君から、はじめて、恐るべき肺病が御白君を襲うたことを聞いた。御白君の病源は、實に語學試驗なのである。それからの御白君の肉體は、傳染病研究所から平塚の杏雲堂病院、次で七里ヶ濱の鈴木療養所へと轉轉した。さうして、二年を横臥のうちに過ごして、去る八月の廿五日に遂に永眠され、屢屢編輯會の折高談した山上御殿で、悲しい追想會も開かればならなくなつた。

御白君が病牀に就いてからも、筆は始終寢臺の上を離れなかつた。さうして、平塚に轉療して、臥ながら白い月光を浴び、遠く波の音を聞くやうになつて、君の短歌は全くその調を改めた。あくまでも、獨創の土臺に立つて、眞な深い生命の泉が、强烈に自由に湧き出でる歌となつた。人生の痛切な哀

感は、はてしもなく流れる涙の、そのままに結晶して歌となつたやうな尊い調であつた。語學試驗は御白君を肺病にした、がやがてまた御白君を一代の詩人としたのである。

惡魔は神か、神はそもそも惡魔か、二者は決して二つのものではない、といふ感じは御白君の死についても思はれるところである。

日記の田波君

内藤鋲策

私の所持してゐるのは、田波君の病院生活の二ヶ年間の日記である。

日記は芝、及平塚の前半に於て殆んど精細を極め、平塚の後半以降七里ヶ濱に至つて稍粗略になり、終の一二ヶ月は全く記してないと言つてよい。過半戀の記錄である。

令兄覺二氏の話に、「他ではそんな事があつたとは聞かないが、自分の處に來ては、おれは三十になれば死ぬと言つてゐた」ときいた。

また附添の川原田功子氏の話に、「二月十九日に撮つた寫眞の裏には、九月十九日沒、薄命御白居士と記されてあつた」といふ。これによると死は田波君の豫言に二十五日先達つた譯である。

年も今年は二十九かと思ふ。

田波君の遺言によつて、法名は其儘、大空院薄命御白居士とされたが、薄命御白居士は田波君自身の選定であつて、大空院は友人の僧である人が加へたものであるとの事だ。

眞に薄命な詩人であつた。

田波君は純な、幼な、それであるから芝居つ氣なところが時時見えた。それがあの病氣にかかつてその、最初即芝の病院時代にあつて、とりわけ際や

かになつてゐる。

そこに都音子といふ看護婦があつた。田波君はこの少女と兄妹の契約を爲し、歌には妹とよんでゐるが、日記には姉のやうに思はるるといひ、つうさん、またねえさんと書いてゐる。田波君はこの少女を強て對照となし、少しでも瞬間でも病苦から離れたいと願つてゐたやうにも思はるる。更にこの少女は日記を通讀してあまりよき性を有つてゐたとは思はれぬが、田波君は彼女の爲に少からぬ金品を惠み、かつ、彼女を終まで忘れてはゐなかつたやうである。それがまた、その純一がまた亡後まで友人の幾多に深く惜まれた原因であつたことは無論である。

田波君は芝の病院時代にあつては、死を空想してゐたに過ぎない。知識的に死を解釋してゐたに過ぎない。

わが知れるすべての人に愛せられ、死にゆくことの何ぞうれしき
それが後には然うでなくなつた。

田波君は病氣乃至死に對し、思想が甚だ幼いものであつた。かつて然うふことを思はせらるるには、少くとも私に比して境遇がやすらかに失した傾がある。(私も亦田波君よりは先に同じ病氣にかかつたことがある)だが、それが却つて後の御自を偉いならしめてゐるかとも思はるる。

獨歩はあまりに打算に明であり、あまりに明敏であつた爲に、彼は思想的に死を知つてはゐたが、臨終までも死と肌を接することは出來なかつた。田波君は殆それを遺憾なきまでになし遂げてゐる。然し、それは後の事であつた。

芝に於ける田波君は、ぜんたい臆病（もし他人に元氣であつたとすれば其れは附元氣であつた事を私は知つてゐる）であつた人だけに、夢中になつて世を恨み、都音子の爲に嚴なる看護婦長を恨み、また友人を恨んだ。

病をばおそれてわれを遠ざかるいともさかしき友のたれかれ

さうして都音子の言葉や、身振やまで、いささかも逃すまじとして、仕事に其れを書いてゐた。

其後、都音子はある事情の爲に病院を退いて、間もなく田波君は平塚へ移つたやうである。

平塚に於ける田波君はあきらめの時代ともいふ事が出來る。（然し其れは無論全くのあきらめではなかつた）田波君は今まで忘てゐた友人をにはかに思

出してやさしみ、なつかしみ、また死をよく理解乃至理解せむとし、悪むことを止めて放意にでも親まうとして來た。

やがて死ぬ身なるになどてかくばかりさびしき地をばもとめ來にけむ

うらやまし、はつなつかぜにふかれつつ何かささやくくらし、草と草

この時分、臨終まで附添つて眞に忠實であつた川原田功子氏を得たのである。

田波君は最終の二三ヶ月に於て全く別人であつた。病に朽ちた全身を其處へ投出して、それを全くの他人が批判するよりは更に明に見据ゑてゐた、死

といふものと肌と肌とを接してゐた。その事は、私の「抒情詩」九月號に發表した「最後の日記より」によつても解することが出來る。

目の前にか、はたうしろにかせまれるや、
死よ、盲目のこの病人に

盲目であることが眞に知られたこの時分になつては、決して彼は盲目でなかつた、血を吐いて胸が清清したと呼んだ御白よりは、

「つよい、せきがでたとおもつたらば、また、けつたんがでた、なんとも、いはれないほど、なさけない、きもちに、なつた」

と、それが他人に見らるるよりは、更におのれが象形文字によつて極めてたやすく自ら再度見出すことを怖れて、ローマ字に書いた處なぞには多大の意味が發見さるると同時に、はるかにおとなになつてゐたことが思はせらるる。

をはりにも一つ話したいことは、例の抒情詩に載せた「最後の日記より」の中程に、「かあちやんのひるね」といふ若い女の寫生がある、これは田波君がかいたのではなからうと思つたので、そのまま見過して了つたが、先日川原田氏が、やはり田波君の爲に親切であつた看護婦の一人と共に私を訪れて來ての話には、「病氣が病氣ゆゑ、附添は夜もおちおち睡れない、それを自身も知つてゐて、晝でも容態の安靜な時には、なるたけ睡つておくやうにといふことであつた、それで、その日は田波君は睡つた樣子なので、そこに橫になると疲が出てそのまま睡込んで了つた、その間に田波君は何時か目醒めて、あべこべに寫生されて了つた」といふことであつた。「かあちやん」は

平常川原田氏をよんでゐた言葉であるといふが、この時の「かあちゃん」は、さきの「ねえさん」とは大分意味が異つてゐたやうに思はるる。田波君は既に既に全く全身の自由を失ひ、赤ん坊と同じ手がせを川原田氏にかけてゐたのである、「坊」と自身をよんでゐたといふ後には、芝居つ氣處ではない、涙が、ほんとうに涙がわいてゐたと思ふ。

それにしても思出さるるのは、あの崇高なる死相である。（九月十六日夜）

墓穴まで

黒田幹一

御白が死んだ、敏感（センチメンタル）な勝氣な氣が小さいとも又情が深いとも云へる、あの御白が死んだ。

世はやや秋の領に入る八月廿四日の夜、七里ヶ濱療養所第二號室の電燈は人も押らぬに宛然（まるで）窒息するやうに消えた。附添の女が廊下へ出て見ると隣の室にも他の六十の室にも明りはちやんと點いてゐる「俺の室だけ電氣の消える筈はない、是は屹度俺が明日死ぬ前兆だ」と氣味悪い暗（くらがり）の白いベツトの上で痩せ衰へた御白が云ふ。肺療院の夜は靜かに更けて咳の聲も次第に稀に七里ヶ濱には浪の音のみが高い。

不安な夜は明けて最後の日が來た。今日は氣持が頁いと御白が云ふ、そして無いことに握り飯を食つた。終りの日が沈んで終の夜が來た。御白は苦しいと云ふ、そしていつもの苦さとは違ふから俺は死ぬと云つた。昨夜雷燈の消えた十一時が近づいた、彼の病は劇に革まつて刻一刻と危險に陷る。

「兄さん！姉さん！長らくお世話になりました」是が彼の最後の言葉で有つたと云ふことだ。

今日は彼の遺骨を埋葬する日と聞いたからせめては亡き友の骨を彼が鄕里なる巴波河畔の墓穴まで送つてやらうと思つて昨夜上京し今朝上野發日光行きの列車に乘つた。空は曇つて乘客は少い。一人つくねんと車窓に凭れてゐると心の靜まるにつれて秩序も何も無い追憶の念がとめどなく湧く。

瀧車は今、榛の林つづく下野の野を馳つてゐる。

「あゝ皐月藤さく時に母うせきあやめさく日に君を得てけり」

歸らぬ母を傷む淚は美しき「君」を得て喜びの淚と流れた。此時から御白は世の若い男のするやうに女と云ふものを疑ひながらいつしか戀の深みに陷つてしまつた。そして彼には春ばかりの年が數年か續いた。けれど之は非常に高價なものであつた。實に彼は此「君」を失つた時に病と死とを得た。母に別れ戀に破れ且は傾く家運に胸痛めつつ不治の病に殘れた彼の短生涯は正に一篇の可憐な詩である。

瀧車は今下野の野を馳つてゐる。

千駄木の秋は御白に忘れることの出來ぬ思ひ出の種であつた。或年のこと、長い夏休も愈愈果てて新橋や上野着の瀧車からは幾萬の學生の日に焦けた顏

が吐き出された。其人込みを離れて千駄木の宿に歸つた御白の姿はいつに無く悄然としてゐた。それから五六日經つた或夕方――彼は私の下宿へ來てしんみりとした調子で「僕は此度家のごたごたで學校を廢すかもしれん」と云つた。此日は口數も少く何か頻りと考へてゐた。で私の机の上に在つた筆を執つて紙切れに繪など描いた端に歌を二三首書きつけてそれをあの美しい聲で哀つぽい調子を附けながら幾度かくちすさんだ。其時遣瀬ないやうな淋しい感に打たれ聞いてゐた私は思はずほろりとした。友の歸つた後で反古を見ると「長かりき短かりけりかにかくにわれらが戀の冬ちかづきぬ」と云ふ小歌もあつた。私はこの家思ひの友が家の方の心配ばかりでなく彼が唯一の慰藉であつた其戀人をも失ひつつあつたのを知つた時に私かに友の身の上を案じた。危懼は事實となつて現はれた。そして彼が日頃胸裡に描いてゐた華や

かな戀の殿堂は風をも待たずに虹の如く消えた。私は其年の冬入營した。新橋驛のプラツトホームで泣いて吳れたのは御白であつた。

在營一年、籠から遁れた小鳥のやうに營門を出た私は友戀し都戀しの情に驅られて行李匆匆上京して見るに御白は已に病床の人となつてゐた。

二週間で退院の豫定であつた御白の病は、一月經つても治らず一年がめぐつても起てなかつた。芝から平塚、七里ヶ濱と轉地して見たが、病は次第に重くなるばかりであつた。其內に二度目の春が來て花が咲き春は暮れたが友は痩せるばかりであつた。此樣にして夏もたけ葡萄の花は實になつたが、御白は遂に起たなかつた。

午後一時、靈車は小山驛に着いた。此處から亡き友の生地迄は二里強、私を乘せた俥は淋しい田舍町を通り林を拔けて又廣い下野の野に出た。俥は處

處に砂利を撒いた國道に轍の跡を殘して馳る。

私が最後に此友を見舞つたのは私が點呼の爲めに歸國する時であつた。其前に彼を見舞つた時に彼は私に此次には羊羹と最中とを土產に買つて來て吳れと賴んだ、私は一日前に出發する積りであつたので彼にも其事を通知した。ところが手紙の都合で出發が一日延びたけれど、どうせ明日は逢へるのだからと思つて彼には別に日延べの通知も出さなかつた。七里ヶ濱へ着いたのは翌日の午後一時半であつた。白いベットの上に仰向けに寢てゐる友の顏は凄いほど蒼ざめて鬢(びん)さへのびてゐた。眼を細目に開けて臥てゐる友を見た時に私は慄つとした。宛然(まるで)此世の者とは思へなかつたからである。附添ひの女が立ち上つたので友は眼を開けた。「恨んだぞ恨んだぞ」と力のない聲で云つたが言葉は咳にと切れてしまつた。私が一日遲れたので友は昨夜寢なかつたと

女が云つた。これ程も重態な病友に一夜の苦惱を與へたと知つた時に私は今更自分の筆不精を非常な罪惡と思つた。院長が一ヶ月以內の命だと死の宣告を與へてから最早廿日になるではないか。それでも私の買つて來た土產を見せると小供のやうに喜んで苦痛を忍んで話した。そして私が乘車の時刻に後れて點呼に間に合はなくなりはせぬかと、女をして屢時計を見させた。「折角來て吳れたに二時間しか話せないのかつまらないね、もう是で逢へないかも知れない」と彼が云ふ。「なに大丈夫だよ來月の始めには又來るから」ああ私は何と云ふ虛言者であつたらう。兄弟よりも親しい彼を慰める最後の言葉にまで虛言を云はねばならなかつたのか。私は眞に「大丈夫」だと思つたか、彼が一日でも生き得ると考へたか。あの蒼白い顏、あの力なく絶入るやうな咳、あの枯枝のやうな腕、鶴の脚のやうなあの脛で其夜が事なく明けると誰

が思つたか。彼は「俺は悲しうなつた」と云つて眼を赤くした。それでも愈愈別れる時が來て私が立ち上ると彼は「君が九月に來る迄は活きとるぞ』と云つたが泪は眼にたまらず力なく蒼白い頰を傳ふて枕に落ちた。彼にはそれを拭ふ力さへも無かつた。私は立ち返つて泪を拭つてやりたいと思つたが急に私の眼が熱くなつたのでわざと顔を背け心を鬼にして廊下を急いだ。少し行つて振返つて見ると御白の室の前の赤いポクシヤの花が最後の名殘りを惜むやうに咲いてゐた。

私は今清流に架けた土橋を渡つてゐる。此が巴波河ぢやと俥夫が云ふ、私は巴波の名を幾度も亡き友の口から聞いた。それと共に今も忘れることの出來ぬのは長野河の名である。月淡き春の夜を亡き友の美しき人を送りて別れを惜んだのもあの河と聞いてゐる。嬉さと悲さの幾滴が其水の面に落ちて流

れたことであらう。そして其もこれも末は一ツの思に落ち合ふものぢやと御白の云つたことがある。俥は林の中に淋しい村に這入つた。向ふを緋の衣をつけた老僧が一人の雛僧を連れて行く其後から金紋の挾箱が行く。此處が亡き友の搖籃の地でもあり又彼が詩の鄕土でもある。俥は草葺の大きな門を這入つて止まつた。人は多勢集つてゐる。私は遺族の人に挨拶した。御白の祖母は私を迎へて泣いた。家は御白の生れさうな家であつた。やがて讀經が始まり弔辭が讀まれ燒香がすむと門火が焚かれる。御白の遺骨を納めてあると云ふ小さな柩が造花や生花に導かれてとぼしぼと再びかへらぬ爲に住みなれた家を出た。葬送の列は曇つた初秋の中をさびしい村を過ぎ細い稻田の畦を辿つて行く。墓地は田の中の要目垣の中に在つた。それから三十分の後には友は色づきそめた實の澤山になつてゐる椿の下で古ぼけた石の六地藏に守ら

れながら此處に永眠の巢を造つた。

葬送の人の去つた後、下野の野は何物かを失つたものの如く秋雨さそふ雲の行き來を見下した太平山にも秋の色はありありと讀まれた。（九月十五日）

御白を憶ふ

山田檳榔

田波御白氏は遂に逝いた。一度は此の悲しい報知に接する日が來るだらうとは思つて居たが、其の來る日のあまりに速かであつたのに、私は驚いた。後藤末雄氏や石坂養平氏などと寄りあつては、いつも、「御白の歌集を輯めて、その病氣を慰めてやらうぢやないか」と話しあつてゐたのであつたが、到頭、果さずにしまつたのが、殘念である。到頭、御白歌集は、遺稿として御白の墓前に捧げねばならぬ事になつた。

御白が不治の病痾を抱いて、轉地するやうになつてから、もう二年になる。「まだ大丈夫だらう」とばかり思つて居たのが間違であつた。あの優しい、靜

かな、おとなしい御白の姿を、まのあたり見なくなつてから、既に二年を経過して居ようとは平生思つては居なかつた。誠に、忙しくばかりして居て、速かな時間の經過を知らずに暮して來た自分達の生活を振返ると、淺間しくもある。あゝした病氣の身を横たへて、寂しい海岸の療養所に、痛ましい死に面して、長い長い退屈な、物悲しい二年の月日を送つた、薄倖な詩人の上を、私は今更のやうに思ひやるのである。

高く寄せくる波の音と、白く飛互ふ鷗の影とを侶に、死に行くまでの悲しい一日一日を、血を吐きながら、歌ひつづけた、あの痛ましい詩人の運命は、涙を誘はずには居らぬ。

血を吐くことと、歌をよむことと。——さうした生活を、春から秋へ、秋から春へと、續けて、到頭、生の終局に到達した寂しい詩人！

御白のさびしい姿を斯う思浮べて見ると、あの薄暗い文科大學の教室の片隅に、力の無い微笑を浮べた、色の褪せた、やさしい物悲しいフイキュアが、ぼんやり、眼に浮んで來る。まことに、弱い、かすかな、影のうすい、輪廓であつたが、おかし、忘れる事の出來ないやさしさと、あたたかみとを、あの人は持つてゐた。

帝國文學の會などで、折折顔をあはせたが、言葉少いあの人は決して多くを語つたことがない。あの輕い、寂しい、青褪めた頬と、あのやさしい、沈默の唇とに、つつんで居た、懐しみは、今も、ありあり、生き殘つて居る。

御白の文科大學時代は、むしろ、散文的であつた。殊に其の晩年は。……が、平塚轉地後の御白、七里ヶ濱養療所に於ける御白の生活も、詩的といふには、あまりに悲慘であつた。悲慘を極めた悲劇的終末を以て彩られた

此の詩人の死を、私は心底から悲しく思ふ。

私が御白の歌に注意してきたのは、七八年來のことである。晩年に於ける其の病床の歌を見て、私は此の詩人の藝術が、彼自身の痛ましい、血の滲んだ生（ライフ）と、緊密に接近して居たのを感じた。そこに、絶大なる詩と藝術とを私は認めた。

私の敬慕して措かなかつた薄倖の詩人は、遂に逝いた。悲しい御白遺稿は、永久に私の哀愁を誘ふであらう。（一三、八、三一、雨まぢめやかに降る日）

まことのうた

石坂養平

田波御白氏は私にとりては未見の人である。手紙の往復をしたことすらない。氏の歌や譯詩を愛し慈む心から、私は藝術の上にあらはれた氏を知つてゐたばかりである。氏が七里ヶ濱から帝國文學に送られた風韻に痛く胸をさされた頃、私は一度でもいいから氏を見たいと思つたが、それも果さないうちに早くも死んで了つた。過日大學内の山上御殿で帝國文學會主催の追想會が開かれた折に、はじめて氏の寫眞二葉を手にし、氏の生前の面影を偲んだ。さうして文科大學の廊下あたりで幾度かそのやさしい容貌を見たことがあるやうな氣がしてならなかつた。

私はどういふものか、詩や歌にあまり親しみをもたない。恐らく私に生みつけられた性格によるのであらう。その詩や歌から滲み出る情味のうちには、詩人や歌人のたはむれ、華かさ悲しさを願ふ心のうるみ、肉體の樂みを樂まうとする淺はかな誇りが見えるやうに思はれてならない。それが私の偏れる心のまぼろしであるにしても、どうしてもこの疑ひを消すことが出來ないでゐる。それゆゑ私は藝術を味ひ藝術品を愛しようとする強い烈しい欲望をもつてゐながら、詩や歌に引つけられることはあまりなかつた。田波氏の歌も以前には私の心に何等の印象をとどめなかつた。私が氏の歌の出てゐるのを見て讀まないでゐられなくなつたのは「死にゆく道すがら」「病と春と」「平塚より」が帝國文學に出で、「落葉」などが新潮に出た頃からである。昨年の秋「七里ヶ濱より」「思を陳ぶ」(帝國文學)を讀むに及んで、私は自分の呼吸

に痛みのあるのを覺えた。「月と海、ささやきそめぬ、わなわなと心ふるへて死をおもふかな」「今日のごとき昨日のごときわれの日の いく日かつづき死にいたるべき」「食事すられながら人にやしなはる あさましき身のはても見るかな」などの數首によりて、私は生命そのものの直寫だ、生きむとする刹那刹那の呼吸のあふれだと直感した。私のこの感じは氏の歌そのものの鑑賞から生れたものでないかも知れない。歌の出た背景、氏の痛しき生活を懷ふ情の閃きであるかも知れない。さかしそれはどうでもよい。所謂歌としてのよしあしを云つてはゐられない。私が貪焚の心持を抱いて氏の歌を味つたことは事實である。さうしてその貪焚の心持は、私が再び經驗しうるかどうか分らないくらゐの、一種の美しき色調を帶びてゐた、と自分ひとりで信じてゐる。(十月一日)

御白兄を追想す

藤田福太郎

ひさしく文科志望といふので、岡山時代既に御白兄とは親しかつたが、僕は筆は執れない、和歌も解せないので、互に往來しても笑ふ樣な話ばかりで、文學を語り議論をすることは寧ろ稀であつた。

僕の見解は誤つてゐるかもらん、其の頃の君は洒洒落落、胸中誠に蟠りなき人であつた、趣味が博くて話柄に富み、話上手で僕を興がらせた、多人數集つての中では口を噤んで語らないが、二三人寄つての座談には、なかなか賑はす方であつた、時時警句を吐いては皆を笑はせた。

互に胸襟を開くに至つたのは、一春二日ばかり岡山縣の海岸を旅行した時

であつた、其時は非常にむつみり話した、兒島灣を廻つて漉川の渚に佇み、日の暮れる迄話した、當時互に獨歩に心醉して彼が人生觀などを語つた。明治四十一年の秋、共に東京に入つてからは往來も繁くなり、無理もいひあつた。

君が素人下宿にゐたことは前後三回、其二回は僕に探さしたのであつた、君が大學での晩年は隨分失意の境遇に悶え、求めて四面楚歌の聲を謠ふ樣であつた、神經も高ぶつてゐたのであらう、何か目に物見せてやるなど口走つてゐた、誰にか、其は語ることを許さぬ、遺稿が出たら或は頷かれるかもしれん。

君の氣質は寧ろ性急で事を急ぐ方であつたが、強ちさうでもないやうで、筆を執つては隨分根氣よく色色のものをかいてゐた、情調が濃かで一寸もの

を書いてもデリケートな題目をつけてゐた。

筆まめでよく手紙をくれた、暑中休暇などによこした物には面白いものがあつた、巧者で時には繪もかき、鐵筆もいじつた、竹に刻んだ御自の印は時時手紙などにつかつてゐた、運動遊戯に關する趣味は別に持たなかつたやうである、物に對する嗜好は小さな氣持のいいものを集めるといふ風であつた、時計の鎖、花瓶、鋏、扁額など思ひ出す節が多い、昔から羊羹が好きであつたが、病氣になる前には酒も嗜んだ、下町のバーやカフエーに時時御共した、殊に去去年の初秋には二人してよく銀座に出かけた、君はあの瓦斯やアーク燈の煌く町を無上に悦んだ、今から思へば何れも皆追懷の種である。

芝の病院に行つてからも、暫く訪れないと恨むやうな手紙をよこした、時時見舞つたが、後には僕が根氣負けして、少し足を遠のけると、今度は何日

にきてくれといつてくる、行くと熱の高まるを承知で話す、隨分困らせられもした、自分はえらい人などにならなくてもいいのだ、唯孤獨に泣く人となりたくないと繰返してはいつた。

忘れもせず去年四月七日、人は三春の行樂に耽るころ、君は二人の友に送られて品川驛を平塚へと旅立つた、濟まぬことだがこれが僕との別れであつた、君は墓標を遺し、詩を遺して歸らぬ客となつたのである、感慨無量である、さらでだに肅殺たる秋に君が遺愛の形見に對しては……。

（九月廿五日夜ふるす）

御白氏追悼

井上猛一

夕焼の空に對ひて立つよりも尊きことにあへるものかな
入日さしたひてゆける鳥かも、若くして死にし心のたふとかりけり
涙たかき濱の夜半の病院に、ことさら秋に逝ける君はも
あたらしき棺(ひつぎ)さしづしづ涙あらき濱べを秋の陽(ひ)にゆくがみゆ

故御白君と私

内藤鋲策

田波君と私との交友は久しく、また淺からぬものであつたやうに思はるるが、それであて會つて話したといふのは、生涯に十二三回、手紙をとりかはしたのも漸くそれ位のものであつたと記憶する。

最初、私が田波君の名を知つたのは、まだ私が故國にゐた時分であつた。さうして我我がやつてゐた「和歌」といふもののほかに、「新派和歌」といふものがあるといふことを聞傳へた時分であつた。明治三十六七年のことであつたと思ふ。

このれがひかなばばはなよあかうさけとつちをきせたるあきくさ
のたれ

これは田波君の作のうち、最初に私の記憶したものであり、大分評判されたものでもあつた。

私の上京したのは三十八年の秋、たしか田波君はその年の春に岡山の方へ行つてゐたやうであつた。

師にわかれ友にわかれてなにゆゑにひとりこゆべき吉備の中山

さういふのがあつた。

私は田波君の作に接するたび、その純一な田波君が、決して私の知らない

人ではないやうに思はれてゐた。

（ほんとうにあの時分のことを思出すと果しがない。いろんなことがあつた。未だ前田若山も微微たるものであつて、萬朝報の投書なぞをしてゐた。また我我はそれを羨望さへしてゐた。當時は今の田波、土岐、吉井、その他澤山な有力な人人があつた。そんな時分あでつたから、田波と私と、友人としてつきあふにはあまりに距離がありすぎた。忘れられない人にはなつてゐたが、それが事實となるには猶多くの時間があつた）

私がはじめて田波君にあつたのは、明治四十一年（？）私が「新潮」にふたたび書出した時分であつて、田波君はすでに帝大に入つてゐたか、乃至入らうとしてゐた時分であつた。

金子さんの宅であつたと思ふ。さうしてその時は原田(實)が一緒であつたやうに覺える。

夜か、曇つた日か、若しくは田波君の顏が暗かつたか、何れにしても陰氣な會合であつた。だが此れが原因となつて、訪ねもし、訪ねても來るやうになつた。

田波君はどちらか言や臆病な人であつた。先日の帝文の追想會で人人の談をきくに、不斷元氣な人だつた樣であるが、私へは意外であつた。それは私の方が元氣すぎたつた故か知れない。私は田波君には何よりもあの熱のない笑を記憶する。

だが、こんな事があつた。明治四十二年春、れいの口語詩の議論が稍下火になりローマ字詩が生れようとしてなほ能はなかつた時分であつた。ひそかに我我がそれを企てゝゐた間に、田波君は「横に眼の切れてゐる日本人が縱の文字を書くといふのは間違だ」と言つてゐた。元氣な人であつたといふのは、人人に對してはこんな議論がたまたま吹つかけられたのであつたらうと此間思つた。

それから明治四十三年五月、私はかつて患つた、田波君と同じそれの再發の兆があつて歸國することになつた。「抒情詩」第一號に載せた田波、原田、私、三人の寫眞はその哀別を紀念したものであつた。

それまで一年くらゐのうち、私は田波君と話合つたといふのは三四回であ

つたとおもふ。また會つて何を話したいふやうな記憶も殆ごない。然し、たえずお互に念頭にはかけてゐたやうであつた。また田波君は私の作に當時無二の同情者であり、愛讀者でありした。その時分の田波君の作はひいきめに見て拙いものであつて、また、私なぞとは大分異つた傾向に走つてゐたが、田波君は然し私の唯一の味方であつた。

私の次の上京は明治四十四年五月、此間まる一年であつたが音信したといふのは二三回に過ぎなかつた。夫は私がさういふ病氣であつて手紙一本出すにも其受くる人の心持にまで氣を廻したあげく、承知して無沙汰した場合が多かつた。

上京して原田と共に細谷(明)を森川町にたづねた歸途、田波君とばつたり

あそこらの横丁で出つ會した。その時田波君には他に友人があつたと思ふが、その友人は何うなつたか、三四人(細谷もゐたと思ふ)池の端を歩いたことがあつた、うすら濕つた暗い晩であつたやうだ。

その時ではなかつたかと思ふ、漢文の試験を伸したとか、伸さうと思つてゐるとかいふ話のあつたのは。

その後、も一度本郷五丁目あたりであつたが、その時田波君には不似合な酒の臭がしてゐた。平氣なやうには言つてゐたが、友人がみな卒業して見ると、面白くなくもなり、多少やけ氣味にもなつたのではないかと思つた。さうして後に田波君が入院したときいた時、そんなことがまた病因の一つではなかつたかとも思合はされた。と先日の追想會では話したが、あの時分のや

いくそな生活のうしろには、現に某銀行員の妻になつて下關あたりにあるといふ、まち子といふ女の不德が連つてゐた事をこのころ知つた。(その際まち子に與へた一通の手紙の草稿は、原稿紙にして百五十枚位はあらうと思はるのが殘つてゐる)

田波君が入院したといふことを聞知つたのは、明治四十五年一月であつたと思ふが、少しあわてすぎたやうに思つてゐた(同情のない言葉のやうだが、私は咯血した時も醫師には見せなかつた)また通信のないのも自身に引比べて、不思議とはしなかつた。

それが、昨年は平塚に轉じ、やや重態の噂をきいたので、今度は私の方であわてて手紙をはせ、なぜ其れまでになる前に音信はしなかつたかと責めたものだ。その時分に手紙を二三往復した。さうして是非訪れてやらねばならぬと思つてはゐたが、何にせい汽車賃のいる處なので、その汽車賃もなかつた私には目のさきの平塚が、甚だ遠いものであつた。

昨年九月になつて、私は出資する人があつて「抒情詩」を創刊することになつた。汽車賃くらゐの融通は利くやうになつたが、今度は不慣な雜務に追立てられて、時間の方が全くない。とうとう十一月まではそれなりになつて了つた。

私は田波君の病中を六七回たづねてゐるが、それはみな其後本年七月九日の最後の訪問までのことであつた。

最初、一年餘の遲延に、その變はてた友の病體をまのあたりにして、思はず涙も流したが、それが爲かへつてあとで發熱したといつてまた心配した。

その後も訪ぬれば、醫員の注意はよそに長く話込んでは了つたが、終の二三回はその話さへ眞に困難にながめられ、さきに死別るるときまれば餘計話もせねばならぬと思つた意地も自然と失せ、話したいことも控目にせねばならぬ場合が多くなつた。附添の人の見えぬ間を、私が身のまはりの世話をすれば、切にわびてゐた友の眼が、私には今も見ゆる。私は目の前では泣けなくなつた代りに、別れて後の汽車の中でさみじみ涙を流させられた。

田波君の亡くなつたのは八月二十五日夜の十一時、私の電報に接したのは翌朝七時半、さうして療養所にたどりついたのは十時時分か、七里ヶ濱は友の爲にか、荒れに荒れてゐた。雨風の日であつた。

編輯の後に

田波御白は予の友人である、彼は可成予の作品の味方であつたが、予は彼の短歌をてんで問題にはしてなかつた。それでも時に讀むことはあつた、だがそれは後から後から忘れて了つた。

それ位であつたから、今度彼の遺稿を編むにしても、予は大抵でなく心配した。最初彼が保存した切抜を二三回通讀したが、これでは何程の作品があればとて到底一冊の集とする事は困難である、詮方なくば他の飜譯なり日記なりを加へねばならぬ、さう絶念めてゐた。

初雪の朝であつた。彼の友人藤田福太郎君、黒田幹一君、と予と、彼の製作をともあれひととほり書取る爲に帝國圖書館で半日萬年筆を走らした。

予は最も靜穩な日をえらんで、心をおちつけて、少しづつこれが選に移つた。失望は豫期したまではなかつた。

數日の後に、二百餘枚を綴つた原稿が手に殘つた。予は予の事務を果して安心もいつか彼の作の餘りに貧しい記憶に打消されて、これを讀返すことに少なからず恐怖を抱き、誰かあつて一度これを讀んで特に感想をきかしてくれればよい、さうして其れがまぐれあたりにでも賞讃の辭であつたとすれば、予の心は稍風ぐであらうと思はれた。

二三日して、藤田、黒田の兩君にあふ事が出來た、さうして兩君の前で予は義理にも一應讀んで聽いて頂かねばならぬ事になつた。然しながら予は此時少しく安心した、それは兩君とも詩歌の人ではないといふ事であつた。予はこの詩歌の人ではない兩君の前に彼の短歌を朗讀して、その如何にも傑れたる如く強ひ、其よろこびを少しでも予はわかちたいと思つた。

何がさて、予は少時して暈んだ、狂つた。藤田、黒田兩君の平靜なるに引換へ、予は萬歳を唱へたくなつた。それからは夢中でよみつづけた。

予は漸く固く信ずることが出來る。予が今日まで手にした歌集の何れより、何れにも比して最も傑れた其れはこの「御白遺稿」一巻である事を。

原稿は其場から直に印刷所に廻され、なほ再度閲すべき機會をもたぬが、やがて製本を終るべき日は共に共に諸君とそのよろこびを分ちたいと思ふ。

なはりに「御白遺稿」は、予がひとつひとつ幾度となく手にかけて完成するに至つた。他におもひおくこともない。

御白遺稿發行發起人

（いろは順）

石坂養平　文學士
服部嘉香　文學士
原田實　文學士
橋本邦助　文學士
半田良平　文學士
細谷明　文學士
土岐善麿　文學士
大久保保七郎　文學士
岡忠太郎　人

「帝國文學」委員　文學士
現代詩文社主幹　早稻田大學文學士
早稻田大學文學士

文學士
中央大學法學士
「生活と藝術」主筆　早稻田大學文學士
文學士
舊白菊會同人

若山繁　文學士
金子雄太郎　創作社主幹　早稻田大學文學士
吉植庄亮　舊白菊會主幹
田波惣兵衛　帝國大學在學
内藤鎭策　田波氏長兄
魚住衛　文學士
黒田幹一　文學士
山田敏一　「帝國文學」委員　文學士
前田洋三　白日社主幹
萬造寺齋　「我等」主筆　文學士
藤田福太郎　文學士

前「帝國文學」委員　文學士

前「帝國文學」委員　文學士　小林愛雄
法學士　赤木朝治
東京帝國大學教授　文學博士　姉崎正治
前「帝國文學」委員　文學士　佐藤貞次郎
工學士
前「帝國文學」委員　佐瀬武雄
帝國大學在學　柚利淳一
遠藤順一

故田波庄藏氏は舊白菊會同人でありまた前「帝國文學」委員でもあつた、編輯者が各自氏名の上に職銜を記入したのは故人との關係の來る處を明にしたいと思つたからである

御白遺稿豫約者氏名

拾部　石坂養平　　武部　石渡榮吉
壹部　井上猛一　　壹部　伊丹善二郎
同　岩井正助　　同　伊藤ふき
同　石川正吾　　同　橋本邦助
五部　半田良平　　拾部　服部嘉香
拾部　原田實　　壹部　服部新五郎
壹部　長谷川邦次　　同　林信一
同　原田忠男　　同　萩原貞雄
同　細谷明　　同　本間常吉
同　星野宗治　　同　星野信之助
同　逸見義亮　　同　土岐善麿
拾貳部　劉須　　拾部　大久保保七郎

壹部　岡　隆太
同　大槻禎郎
同　大野匡之
同　大井廣
同　尾山篤二郎
拾部　若山繁
壹部　勝原雅大
同　梶原景壽
拾部　金子雄太郎
同　横山芳介
參拾部　田波惣兵衛
壹部　高橋嘉四郎
同　田村陸三
同　辻田健次
貳百部　小笠原儀
壹部　沖鹽正光
同　岡田清
同　大久保甚吉
同　和田直樹
同　川原田功子
壹部　川井精春
同　加藤俊三
拾部　吉植庄亮
同　高村光太郎
同　田熊保行
同　田波芳三
壹部　曾我部卓男
同　内藤鎭策

壹部　中里富次郎
同　魚住衛
參部　黒田忠次郎
壹部　草木眞吾
五部　前田洋三
拾部　增田宗二
壹部　松井清市
同　藤田福太郎
六拾五部　小林愛雄
同　近藤宗男
拾部　姉崎正治
壹部　青山正右衛門
同　小豆澤清
同　佐藤貞次郎
同　武藏秀澄
壹部　黒田幹一
同　久保田眞市
六拾五部　山田敏一
壹部　萬造寺齋
同　松本彦七郎
同　增田稻雄
同　藤田庄平
拾部　古泉幾太郎
同　赤木朝治
壹部　阿部龍夫
同　雨森長三郎
同　荒井政重
同　佐木順

壹部　榊原安彦
同　齋藤茂吉
同　佐野德次郎
同　清島伍一郎
拾部　柚利淳一
壹部　水野盈太郎
同　芝野正豪
同　畫間盛吉
參部　追加豫備

計六百部

壹部　西條八十
同　左居宗俊
同　坂部廣吉
同　木村英之
同　三木操
貳拾五部　三塚繁雄
同　遠藤順一
同　鈴木龍司
寄贈部

大正三年四月二十一日印刷
大正三年四月二十四日發行

定價金九十錢

著作者　故田波御白

發行者　內藤鋠策
小石川區白山御殿町三十二番地

印刷者　長坂政之助
牛込區築筒町四十四番地

發行所　小石川區白山御殿町三十二番地抒情詩社內
御白遺稿發行所

不許複製

抒情詩社大正

道程

高村光太郎第一詩集

同氏裝幀插畫彫刻

四六判三百頁
定價金壹圓
送料金六錢

三年四月刊行

熔岩

内藤鋹策第二短曲集

高村光太郎氏裝幀

菊半截二百頁
定價金四十錢
送料金四錢

歌集 旅愁 再版

歌壇空前の美本

特製 金七十五錢 送料金六錢
裏白二色刷
（天金箱入）
用紙28上質

並製 金五十五錢 送料金四錢
用紙「櫻」柾

菊判半截三百頁